

戦時中、情報局が出していた『週報』の昭和19年11月15日号が、筆者の手にあります。『週報』は、政府のプロパガンダのための冊子で、一部5銭、表紙に「隣組・職場で必ず回覧を」と印刷されていますから、当時の荻窪でも回覧されていたかもしれません。そんな冊子をコラムで紹介しようと考えたのは、ウクライナへの侵攻で国際的に孤立するロシアと太平洋戦争中の日本の孤独な姿が重なって見えたからです。いったい、孤立無援、追い詰められた日本は、当時、何を考えていたのか。その一端を『週報』の記事を通して覗いてみました。

まず、新聞なら社説にあたる「週言」の一部を引用で紹介しましょう。

「ラバウルでは地下道三百キロが完成し、食料は自給で、兵器工場まである。正に太平洋中の金城湯池（注・難攻不落の城のこと）が出来上がり、将兵の士気軒昂たるものがある」「ラバウルの将兵を見ならって、空襲を恐れておらずに、地下で生活することが肝腎であり、作る畠のないことをこぼしているよりも、掘った穴の土を屋上にあげて野菜を作ることを実行した方が賢いというものだ」

ちょっと説明を加えますと、ラバウルは南洋諸島に展開した日本軍最大の基地で、自給自足のため兵士が畑を開墾し、農作業に励んでいました。本土の都市の住民もそれを見習って地下の防空壕を住居に、野菜を作って暮らせというのです。しかし、現実にそんなことが可能だったでしょうか。本土空襲の危険が迫り、食糧不足が深刻になるなか、気休めに国民に発した無責任なアドバイスとしか思えません。それより怖いのは、それにつづく「武器はますます近代化し、生活形式はますます原始化する。これが戦争の様相である」という言葉。近代的な武器

を作るためには、国民の生活や生命は犠牲にしてもいいと言っているわけで、究極の人命軽視である「特攻」にもつながる論理です。

次の「国運賭す比島決戦」の記事は大本営海軍報道部によるものです。フィリピン沖海戦（レイテ沖海戦）で、日本軍は、空母4隻「不沈艦」といわれた武蔵をはじめとする戦艦3隻を撃沈されるなど、ほぼ全滅したのですが、

大本営は「我が軍の収めたる戦果は、全く世界歴史に類がないほど大きなもの」といはばかりませんでした。そして、記事の後半は、「**レイテ方面の攻防戦は断じて勝たねばならぬ千載の一戦である**」「飛行機さえあれば、絶対勝てる」「**いま一億起たずして、いつの日か日本民族騰起の秋があるろう**」と、ゴシック体の文字が絶叫しています。ちなみに、神風特別攻撃隊が創設されたのも、フィリピン沖海戦でのことでした。

「戦う物資」という記事もあります。たとえば、松の根から採れる油を航空機の燃料として使うため、所有者に根の供出を呼び掛けています。かくも深刻な物資不足で、よく戦争を続行したものだと思えますが、当時の人々はどう受け止めていたのでしょうか。現実には、戦争は、なお9カ月も続き、膨大な数の犠牲者を出すことになりました。以上、終戦の日になんで。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男

